

1 研究主題

児童が主体的に「かかわる力」を育てる道徳教育の研究

～ 教材と 友だちと 自分とかかわる「道徳科」の授業づくりを通して～

2 主題設定の理由

「生きる力」をはぐくむことは、今回の学習指導要領でも最重要視されている。この「生きる力」とは、変化の激しい社会において、人と協調しつつ自立的に社会生活を送ることができるために必要な、人間としての実践的な力であり、豊かな人間性を重要な要素としている。この豊かな人間性を培う基盤としての道徳教育の充実が現在の重要な課題のひとつである。また、教科化された「道徳科」の学習指導要領では「教材を読むだけの読み物道徳から、考え、議論する道徳へ」の転換が求められ、言語活動の充実が示されている。「道徳科」における言語活動は、自分の考えをしっかりと持つことや相手に伝えることを通して、豊かな心の育成につながると考えられる。

本校は、児童数118名、各学年単学級の小規模校である。児童は、豊かな自然や、学校に協力的な地域社会の中でのびのびと育ち、純朴で明るく素直である。また、これまでの本校の教育実践の積み重ねにより、地域に目を向け、地域への愛着を深めることもできてきている。その反面、自分自身のよさや成長に気づけないために自分に自信が持てなかったり、自分自身の思いや考えをうまく表現できなかったり、という児童の持つ課題もある。

本校では、これまで「豊かな心の育成」を教育の重点事項の第一にあげ、道徳教育に焦点を当てた研究に長年取り組んできた。その中で、道徳教育の“要”である道徳科の授業を中核とし、各教科等に関連させながら単元を構成する総合単元的な学習を通して、授業実践を重ねる研究を進め、児童の心の教育にあたってきた。その結果、道徳教育の全体計画に基づき「道徳の年間指導計画」を作成して道徳教育の“要”である道徳科の授業を確実に実施してきたこと、そして、「学年における道徳と教科等との関連」をもとに学校教育全体で道徳教育を意図的・計画的に実践してきたことで、道徳教育の充実が図られてきた。この研究の積み重ねにより、児童は、徐々に道徳的実践力が育成され、道徳性が養われてきている。

過去3年間は、道徳教育の“要”である「道徳科」の充実をめざし、授業作りに焦点を当てた研究に取り組んできた。特に、教材とかかわらせるための教材提示の工夫や、ねらいとする価値に迫るための発問の工夫。また、友だちとかかわらせるためのみなみタイム（交流タイム）を設定し、「かかわる力」を育てる授業作りに取り組んできた。その結果、教材に興味をもったり、喜んで友だちとかかわろうとしたりする児童の姿が見られるようになった。また、指導者自身が道徳教育における道徳科の授業の重要性を再認識し、週に1時間の授業に、真摯に取り組む姿勢につながった。さらに、家庭との連携を深めるために「道徳ノート」を作成し、保護者に児童の学習を知ってもらい、認め励ましてもらうことで、児童の心の栄養となってきた。

しかし、どこかお話の中の他人事で終わってしまっていたり、これまでの自分の経験や生活場面と結びつけて考えることができていなかったりという児童の姿が見られた。そのため、昨年度は特に、児童が道徳的な問題を自分自身の問題として主体的に受け止め、友だちとかかわりの中で自分の考えを明確にし、道徳的価値を自分事として捉えていく児童の育成を目指し、研究を進めてきた。キーワードは「自分事」である。

一つ目の視点「教材とかかわる力」を高めるためには、教材提示や発問の工夫が大事であること。また、子どもたちの考えをぐっと深めさせる切り返しや問い返しの発問の重要性も明らかになった。

二つ目の視点「友だちとかかわる力」を高めるために、「みなみタイム」の充実に力を入れてきた。ただ単に交流の時間を設定するだけでなく、系統性をもたせた「みなみタイム」の在り方について明確にする必要性を感じた。また、道徳科だけに限らず、他の教科でも「みなみ

タイム」を取り入れていくことが「かかわる力」の育成につながることを共通理解し、実践を積み重ねてきたところである。

三つ目の視点「自分とかかわる力」を高めるために、これまでの生活場面と結びつけて考えさせたり、ワークシートを工夫したり手立てを工夫してきたが、まだまだ十分とは言えない。教材から自分にかえすための手立て。また、道徳的価値にかかわる児童の考え方がどのように変容したかを見取って、評価につなげていかなければならないが、そのための手立てや評価の方法などについては、今後さらに研究を深めていく必要がある。

そこで、今年度も引き続き「児童が主体的にかかわる力を育てる道徳教育の研究」を主題に掲げ、研究を深めていきたい。

3 研究主題について

「教材と かかわる」とは

道徳的な問題を自分事として受け止め、教材の登場人物に共感したり、違う考えにふれたりして、主体的に学ぼうとする力

「友だちとかかわる」とは

「みなみタイム」（交流タイム）を中心に多面的・多角的に考え自分の考えを明確にする力

「自分と かかわる」とは

今までの自分、これからの自分について考え、自己を見つめる力

4 研究の目標

児童が道徳的価値について主体的に考え、自分事としてとらえる道徳科指導の在り方を探る。

5 研究の仮説

導入の工夫や発問の工夫により、子どもの心を揺さぶったり、対話的な学びの視点に立ったみなみタイムの工夫を行ったりするならば、子ども自身が主体的に学び、多面的・多角的に考えながら、自己の生き方についての考えを深め、道徳性を高めることができるだろう。

6 研究の視点

- (1) 導入の工夫
- (2) 発問の工夫（テーマ発問，中心発問，切り返しの発問，問い返しの発問など）
- (3) みなみタイムの工夫
- (4) 自分事として捉えさせる工夫
- (5) 評価につながる取り組み（ワークシート，道徳ノートなど）
- (6) 日常生活における道徳的実践力を高める取り組み（環境整備，道徳コーナーなど）

7 研究の内容及び方法

- (1) 道徳科の授業づくりや指導方法の工夫，評価について，理論研究を行う。
- (2) 道徳科の授業実践に積極的に取り組むとともに，研究授業・研究会を充実させ，授業づくり及び児童の活動の見取りと評価についての改善を図る。

- ・全学年において、研究授業を行う。
 - ・研究主任または旧職員が、年度始めに提案授業を行う。
 - ・低学年・中学年・高学年で、講師招聘の全体研を1つ、グループ研を1つずつ行う。
 - ・講師を招聘し、道徳教育に関する理論研究を行う。
 - ・配慮を要する児童に対する道徳科指導の在り方を探る。（特別支援学級を中心に）
- (3) 道徳アンケートなどを実施し、児童の実態把握と研究による変容を見る。
- (4) 児童の心を育てることをねらいとする日常の教育活動の充実と環境整備に努める。
- (5) 家庭との連携を深めるための方法と、よりよい連携のあり方を模索する。
(道徳ノートの活用など)

8 研究の組織

〈組織図〉

